



1号館の外観。全長100mを超える、世田谷キャンパスの新たなランドマークが誕生した。

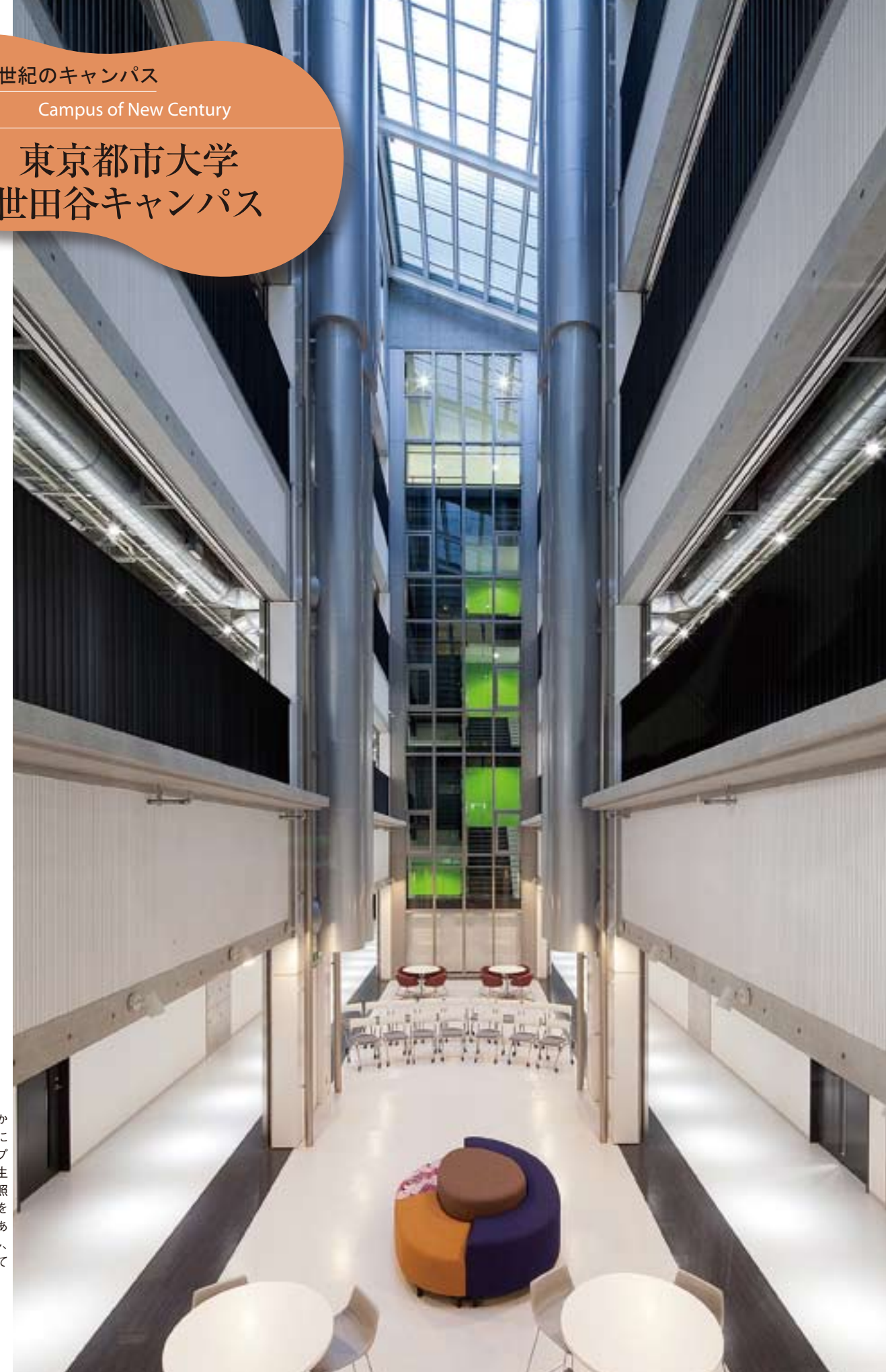


「SAKURA CENTER #14 (体育館・食堂棟)」前のサクラガーデンは、学生・教職員・地域住民が集う新たなパブリックスペースだ。

新世紀のキャンパス

Campus of New Century

## 東京都市大学 世田谷キャンパス



1号館は地下1Fから4Fを吹き抜けにすることで、トップライトが地下の学生ラウンジを明るく照らしている。外気を取り込むダクトをあえてむき出しにし、デザイン性を高めている。



地下1F、地上4F建ての図書館に配された、ギャラリーを思わせる空中庭園(右)。2-4Fの一般・個人閲覧室、貴重図書室など、各階でインテリアが異なり、メディアライブラリー(上)やプレゼンテーション室などがある地下1Fは一転、近未来を思わせる空間だ。

東京都市大学世田谷キャンパスにおいて、今年1月に新1号館が竣工した。

この建物は、キャンパス中央と正門前に位置し、講義棟機能と本部棟機能を担う中央施設だ。地下1F、地上4F建ての1Fには、ワンストップサービスで学生支援とキャリア支援を行う「総合インフォメーションエリア」、B1-3Fには大中小教室49室、4Fには研究室、事務管理部門、「ラウンジオーク」などを配置。同キャンパスの新たなランドマークとなった。

1997年の横浜キャンパス開設時から、早期にエコキャンパス化に取り組んできており、そのノウハウがこの新1号館にも生かされている。「20教室の照明電力をまかなう太陽光発電、室内に自然光を取り込むトップライトやライトシェルフ、春と秋を空調なしで過ごせる自然換気窓、西日の輻射熱を回避する外付けブラインドなどを採用するなど、環境対策に積極的に取り組んだ。」と学校法人五育英会法人本部の渡辺透部長(施設担当)は語る。

同大学において最も歴史あるこの世田谷キャンパスでは、教育研究環境の向上をめざし、10年以上前から、計画的にリニューアルが進められてきた。

まず2003年に「SAKURA CENTER #14(体育館・食堂棟)」、2004年に「新図書館」が相次いで建設された。この二つの建物の完成により、渡辺部長によると、「キャンパスに長く滞在する学生が過ごす空間の確保と環境が改善されたことで、キャンパス自体の雰囲気も大きく改善することができた」という。

2006年に建設された「新建築学科棟」では、学科を構成する様々な専門分野のシナジー効果を狙い、新時代の建築教育を具現化した。1-2Fの吹き抜け構造「グランドギャラリー」がそれで、製図室、デザインステージ、ゼミコーナー、研究室などが、壁を取り払った大空間の中に混在し、学部生・大学院生・教員が一つの空間の中で創造性を高める工夫が施されている。



2007年の医用工学科(当時・生体医工学科)設置に伴い、2009年には「新2号館(医用工学科棟)」を建設した。医工連携を学ぶ学科で、解剖実習を行う「手術室」や「臨床実習室」など、病院レベルの最先端の教育環境を提供している。

2009年度に武蔵工業大学から東京都市大学に名称変更し、総合大学として新たにスタートして、早や5年が過ぎた。この間にも学部学科の改組や教育研究環境の改善などの改革が継続して行われてきたが、さらなる持続的発展に向けた将来ビジョン「東京都市大学アクションプラン2030」が今般策定された。創立90周年、100周年を見据えた挑戦に期待が高まる。

(本誌 能地泰代)



一歩足を踏み入れた瞬間に、クリエイティブを刺激される建築学科棟「グランドギャラリー」。旧棟は細かい部屋に区割りされ、異分野交流が十分でなかったという。



1号館には合計7つの学生ラウンジが用意されている。写真の学生ラウンジを訪れた際には、ホワイトボードに計算式が書き残されていた。

1号館4Fのラウンジオーク。教職員専用だが、ピークを過ぎた時間に学生も使用できる。夜はパーティーにも使用でき、テラス席や卒業生のための予約スペースも用意されている。



新2号館(医用工学科棟)の手術室。麻酔器や電気メス、AEDなど病院にも劣らない設備を整えている。



7・8号館にあった教室を1号館にまとめた。固定座席・可動座席の教室、PC教室、地下1Fの防音教室など、49室がある。